

聖書：ピリピ人への手紙2章1～18節

説教題：世の光として輝く

1 世の光として輝くとは

16節に「彼らの間で世の光として輝くためです」とあります。主も、「あなただけが世界の光です」（マタイ5章14節）と言われました。主を信じる者として、どのようにしたら世の中で光り輝くことができるのか。ことあるごとに考えることがあります。例えば、困っている人をお世話をする。援助する。そんなふうを考えて一生懸命奉仕される方々がおられます。すばらしい働きです。

しかし、いろいろな事情でそうできない人たちもいます。そんな人たちは、一見何もできない、何もしていないように見えます。そのような人たちは、世の光になれないのでしょうか。

救われた者はだれでも例外なく、世の光として輝くことができる。それが主の約束であるはずで、光り輝くとはどんなことなのか。今日はそこに焦点を当てていきます。

2 背景

毎週聞いている方には繰り返しになるのですが、パウロは何を思ってこの手紙を書いたのか。そこをもう一度確認します。

パウロは裁判を受けるためにエルサレムから囚人としてローマに送られてきました。そのあたりのことは使徒の働き22章以降に書かれています。ローマへまっすぐに送られてきたわけではありません。あちらこちらをたらい回しにされました。乗った船が嵐で座礁し、危うく死にかけたことさえありました。

ローマに着いてからも大変でした。どうしてあなたは逮捕されたのか。どうして裁判にかけられようとしているのか。なぜ遠くはるばるローマまで連れて来られたのか。政治的に高い身分にある人たちはパウロに興味を持ち、いろいろ質問します。それに答えるためには、どうしても自分の信仰のことを話さなければなりません。聖書の神を信じ、そのことを語ったがためにエルサレム中が大騒ぎになった。その結果、危険人物とみなされ逮捕され、ローマに送られ裁判にかけられているのだ。パウロの逮捕がきっかけで福音が思わぬかたちで宣べ伝えられました。

それを見てローマ在住のクリスチャンの多くは喜びました。いっぽう、パウロのことをねたむ人たちも現れました。パウロはピリピの教会の人たちを心配させたくないで、あまり詳しく手紙には書きません。でもこのことで相当悩んだようです。ですからピリピの教会にはこのようなことを繰り返して欲しくない。ローマのある一部の人たちのようになってはならない。心を合わせ、志を一つにしてもらいたい。そんなことが背景にあって、16節の「世の光として輝く」ということばにつながっていきます。

3 ねたみとへりくだり

1) ねたみ

パウロがローマに送られたことがきっかけで、福音が思わぬ人たちに伝えられました。これを見て、ある人たちがパウロを攻撃しま

す。パウロは間違っていて、自分たちこそ正しいのだと言って、熱心にキリストを宣べ伝える。そんな動きがありました。

どうしてそんなことになったのでしょうか。よそ者がやって来て、何かをしようとすればどうしても目立ちます。ローマ在住のクリスチャンにもう少し配慮すべきだったのかも知れません。

しかし、問題の本質は、そんなところにあったものではありません。パウロを強く攻撃した人たち。彼らの奥底にある動機は何であったか。それを見る必要があります。パウロは正しく見抜きました。1章15節で言っています。「人々の中にねたみや争いをもってキリストを宣べ伝える者もいます。」

皆さんも、これまで一度や二度は人間関係のトラブルに巻き込まれて大変悩んだ経験があるはずです。こちらの不手際で相手に迷惑をかけたというのなら、謝って赦していただくしかありません。ところが、こちらには思い当たるふしがないのに、ある日突然相手が怒りだし、激しく攻撃されてしまい、驚くことがあります。自分のどこが良くなかったのかと、自分を責めて落ち込みます。おそらくパウロもそのようなところを通ったのでしょう。外側からやってくるねたみで苦しみます。

またそれとは逆に、自分の内側にある人をねたむ思いに苦しむこともあります。

以前にも言ったことですが、私がサラリーマンとして働いていたとき、同期で入社し、ほとんどいつも同じタイミングで昇進していった同僚がいました。しかしあるときの人事異動で、私はそのままなのに、その人は一つ上のポストに昇進したのです。そのときのことを今でも忘れません。クリスチャンに

なったのだから、もう自分はこの世の出世とかそんな価値観とは関係がない、自分は大丈夫と思っていました。ところが、人事異動の発表を見て自分でも驚くほどうろたえました。仕事が手につかないとは、まさにあのことです。自分の中にこんな人をねたむ気持ちがあったのかと愕然としました。信仰によって新しい自分に変えられたと思い込んでいたのですが、何も変わっていない。古いままの自分がそのまま残っていました。

「自分は大丈夫」という自信はまったくあてになりません。口では何とでも言えるのです。実際は、自分の心の闇の底に、ねたみという思いか蛇のようにとぐろを巻いている。そのことに気がつかないでいるだけ。あるいは、気がつかうとしないだけ。それが本当の姿です。まさに罪人の姿です。

2) キリストのへりくだり

だからパウロは言います。「何事でも自己中心や虚栄からすることなく、へりくだって、互いに人を自分よりもすぐれた者と思いなさい。」

人をねたむのではなく、へりくだりなさい。互いに人を自分よりもすぐれたものと思いなさい。それがやがて世の光として輝くこととつながると言うのです。

頭ではわかっています。いつも同じことを繰り返しますが、わかっているけれどもできない。それが私たちの現実です。

心の中にねたみがあっても、そんなことは押し隠し、へりくだっている自分を演じます。人のいる前では謙遜なふりをするのですが、家に帰ると人の悪口を言いだします。自分が真っ先にへりくだろうとは思いません。まず

あなたが先にへりくだりなさい。そうしたら私もへりくだるから。そう言いたくなる自分がいます。

主はどうされたでしょうか。キリストは神であるのに、神であることを捨てて、ご自分を無にされ、仕える者の姿となり、自分を卑しくし、死にまで従い、十字架の死にまでも従いました。神である方が、私たちお罪を背負われて十字架で処刑される。そのような死に方を選ばれました。

主が教えてくださる、へりくだりとはなんでしょう。誰かから言われてすることではありません。理不尽なことを言われたり、ひどい扱いを受けても、いっさい言い返しません。人の罪を進んで背負われます。何の見返りもありません。それどころか、激しい怒りと、厳しいことばが投げつけられるだけです。最期は、人のために命をお捨てになりました。これが主のへりくだりです。

主はなぜ十字架につけられたのでしょうか。「ピラトは、彼らがねたみからイエスを引き渡したことに気づいていたのである。」(マタイ 27 章 18 節) 人のねたみが主を十字架に追いやったのです。私たちは、救われた今も、ねたむ思いを抱え続けています。そんな自分が、本当の意味でへりくだれるはずはありません。へりくだれないのなら世の光として輝くこともできません。

4 恐れとおののきによって

ではどうするのですか。もう一度聖書をよく読みましょう。12 節。「そういうわけですから、愛する人たち、いつも従順であったように、私がいるときだけでなく、私のいない今はなおさら、恐れおののいて自分の救いの達成に努めなさい。」

ここに「自分の救いの達成に努めなさい。」とあります。これを読んで疑問に思われた方もいるはずですが。救いは信じて恵みとしていただくものであって、人の努力によるものは絶対がない。これが私たちの信仰です。それなのにパウロは努力しなさい。がんばりなさいと言っているように聞こえてしまいます。

よく注意してください。ここに「恐れおののいて」とあります。わかりやすいようにこのところを言い換えます。「あなたがたが、恐れとおののきをもって歩むなら、やがてあなたがたは救いに至ることができるでしょう。」

だれであっても、自分の中にねたむ思いがすることに気がつかされたとき、神のきよさの前でおののくしかありません。こんな自分であることを神の前で恐れるほかありません。努力して恐れるとか、努力しておののくと言っても意味がありません。心の奥底からわき上がってくる感情だからです。

けれども、神の前に自分の汚れた姿を自覚して、恐れおののく。その時私たちは、世の光と輝きだすのだと言うのです。不思議に聞こえますか。初めて聞いたというのでしょうか。

神の前で自分の罪と汚れに恐れおののくとき、何が起きているのでしょうか。神は目には見えません。けれども神の御臨在の光は、私たちの罪に反射して輝き出します。それを世の人たちが見ることになります。

普通、きれいな鏡でなければ光をうまく反射させることはできません。しかし、神の光は、私たちの黒い罪のところから反射され、世の光となって輝き出します。

私たちの考えをはるかに越えた驚くべき主のみわざに感謝いたします。